Osaka University Knowledge Archive

Title	目で見るWHO　第56号　表紙・目次・資料等
Author(s)	関, 淳一
Citation	目で見るWHO. 2015, 56, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/86684
rights	
Note	

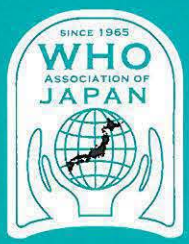
Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

目で見るWHO

Food safety



ー第56号ー

2015 新春号

発行 公益社団法人 日本WHO協会

日本WHO協会とは

公益社団法人日本WHO協会は、世界保健機関（WHO）憲章の精神を普及徹底し、その目的達成に協力し、我が国及び海外諸国の人々の健康増進に寄与することを目的として設立された団体です。設立より半世紀近く、関西を拠点にグローバルな視野から国内外の人々の健康を考え、行動しており、今後も積極的に目的達成のため活動していきます。

(1)WHO憲章精神を普及するための健康に関するセミナー等の開催及び機関誌・広報等の啓発事業
(2)健康に関する調査研究の受託・委託及び助成並びに研究成果に基づく提言等の研究事業
(3)国内外で健康に関する社会貢献活動を行う企業、団体並びに個人との連絡・調整・協力等の連携事業
(4)WHOの事業目的達成に寄与するための募金活動及び募金収益の拠出並びに活動協力等の支援事業
(5)国内外の健康の向上につながる人材の育成・援助等の人材開発事業

CONTENT

ごあいさつ …… 1

沿革 …… 2

●第4回Jaih-sとの共同企画フォーラム開催報告

「紛争概論×少年兵のメンタルヘルス」～紛争の終とは～

開会の挨拶 ……関　淳一… 3

……吉村 翔平・内田 絵里… 4

紛争概論 ― 少年兵問題の観点から ……小野 圭司… 5

少年兵のメンタルヘルス ……小川 真吾…10

●WHOインターンシップ体験記

西太平洋地域事務局インターンシップ報告 ……石川　渚…17

●Food Safety 食の安全

本当は危ない食品のカビ毒（マイコトキシン）汚染

……川村　理…20

フォーラム開催のお知らせ ……25

ごあいさつ

公益社団法人 日本WHO協会
理事長 関　淳一

皆さま方には気持ちも新たに2015年の新春をお迎えになられたことと思います。

また、昨年は当協会の活動に多大のご協力を賜り、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

昨年2014年度の世界保健デーのテーマは「節足動物が媒介する感染症から身を守ろう」でしたが、日本でもデング熱の国内感染が確認され、特に東京では8月に入り、代々木公園とその周辺で発生したデング熱について、代々木公園で捕獲して蚊からウィルスが検出されたことにより、代々木公園の一時閉鎖の止むなきに至りました。

また、これとは別に、一昨年(2013年)12月に西アフリカのギニアで流行の始まったエボラ出血熱(エボラウィルス症)は国境を越えてリベリアとシエラレオネなどに急速に広がり、患者数増加のスピードの速さと死亡率の高さ、また感染者の入国時の水際作戦の困難さなどから、世界中の国々に対して改めて感染症防御対策について問題提起となりました。

WHOも8月8日に、保健上の緊急事態と判断し、加盟国に対して、対応策についての具体的な指示を出すに至りました。西アフリカのエボラ出血熱のアウトブレイクは、今尚、終息には至っておりませんが、世界各国に大きく広がることは防がれております。

これらの、昨年後半の世界における一連の感染症の状況を見る時、私は1948年にWHOが発足する前に議論されたときの、WHOの原点とも言える、「一国でも保健医療の体制が遅れている国があれば、世界中の国がその影響を受けることになる。」また「今や一国では、自国の国民の健康をまもることはできない」と言う言葉を改めて思い出しておりました。

昨年9月27日に、日本国際保健医療学会学生部会(jaih-s)の方たちと第4回の共催企画によるフォーラムを開催することができました。タイトルは、「紛争概論×少年兵のメンタルヘルス」～紛争の終わりとは～でした。

今回も、フォーラムのテーマの選定や企画等は全てjaih-sの方たちにお任せしましたが、講師の先生方にも恵まれ、色々と考えさせることの多い、意味深いフォーラムとなりました。そのフォーラムの内容を本号に掲載することができました。講師をお引き受け頂きました、小野圭司先生、小川真吾先生に改めてお礼申し上げます。

また、昨年2月から6カ月間、WHOの西太平洋事務局(WPRO)の結核・ハンセン病対策課でインターンシップを経験された石川渚様にその時の貴重な体験の数々についてのレポートをご寄稿頂きました。石川渚様の今後の活躍を期待いたします。尚、私共の協会のインターンの方々に対する経済的支援事業につきましては、今後、目的をこの事業に限定した寄付金集め等も行い、一層充実させていきたいと思っております。

去る11月末に、今年の世界保健デー(4月7日)のテーマがWHO本部から発表されました。テーマはFoodsafety(仮訳:食の安全)です。現在世界中で食糧供給のグローバル化が進んでおり、極めて時宜に適ったテーマであると思います。

今回、香川大学農学部川村理教授に、急遽お願いし「本当は危ない食品のカビ毒(マイコトキシン)汚染」を御寄稿頂きました。是非、御一読の上、参考にしていただきたいと思います。

(公社) 日本WHO協会の沿革

1948　[「WHO憲章」が発効し、国連の専門機関として世界保健機関 (WHO) が発足する。]
1965　WHO憲章の精神普及を目的とする社団法人日本WHO協会の設立が認可された (本部京都)。会報発行、WHO講演会等の事業活動を開始。
1966　世界保健デー記念大会開催事業を開始。
1970　青少年の保健衛生意識向上のため、作文コンクール事業を開始。
1981　老年問題に関する神戸国際シンポジウムを主催。
1985　WHO健康相談室を開設、中高年向け健康体操教室を開講。
1994　海外のWHO関連研究者への研究費助成事業を開始。
1998　京都にてWHO創設50周年シンポジウム「健やかで豊かな長寿社会を目指して」を開催。
2000　WHO健康フォーラム2000をはじめ、全国各地でもフォーラム事業を展開。
2006　事務局を京都より大阪市内へ移転。
2007　財団法人エイズ予防財団 (JFAP) のエイズ対策関連事業への助成を開始。
2008　事務局を大阪商工会議所内に移転。定期健康セミナー事業を開始。
2009　「目で見るWHO」を復刊。パンデミックとなったインフルエンザに対応し、対策セミナーを開催。
2010　WHO神戸センターのクマレサン所長を招き、フォーラム「WHOと日本」を開催、WHOへの人的貢献の推進を提唱。
2011　メールマガジンの配信を開始。
2012　公益社団法人に移行。
世界禁煙デーにあたってWHO神戸センターのロス所長を招き、禁煙セミナーを開催。

第二次世界大戦の硝煙さめやらぬ1946年7月22日、世界61カ国がニューヨークに集い、すべての人々が最高の健康水準に達するためには何をすべきかを話し合い、その原則を取り決めた憲章が採択され、1948年4月7日国連の専門機関として世界保健機関WHOが発足しました。

当協会は、このWHO憲章の精神に賛同した人々により、1965年に民間のWHO支援組織として設立され、グローバルな視野から人類の健康を考え、WHO憲章精神の普及と人々の健康増進につながる諸活動を展開してまいりました。

歴代会長・理事長、副会長・副理事長（在職期間）

会長・理事長

中野種一郎(1965-73)
平沢　興(1974-75)
奥田　東(1976-88)
澤田　敏男(1989-92)
西島　安則(1993-06)
忌部　実(2006-07)
宇佐美　登(2007-09)
関　淳一(2010-　)

副会長・副理事長

松下幸之助(1965-68)
野辺地慶三(1965-68)
尾村　偉久(1965-68)
木村　廉(1965-73)
黒川　武雄(1965-73)
武見　太郎(1965-81)
千　宗室(1965-02)
清水　三郎(1974-95)
花岡　堅而(1982-83)
羽田　春免(1984-91)
佐野　晴洋(1989-95)
河野　貞男(1989-95)
村瀬　敏郎(1992-95)
加治　有恒(1996-98)
坪井　栄孝(1996-03)
堀田　進(1996-04)
奥村　百代(1996-06)
末舛　恵一(1996-04)
中野　進(1998-06)
高月　清(2002-06)
北村　李軒(2002-04)
植松　治雄(2004-06)
下村　誠(2006-08)
市橋　誠(2007)
更家　悠介(2008-　)